

仏教文化公開講座講演録要旨

大乘菩薩道のころころ — 仏伝・ジャータカと仏像出現に学ぶ

佐々木 惠 精

皆さん、こんにちは。昨年（平成二〇年）三月まで京都女子大学で仏教学を担当していた佐々木です、現在は非常勤講師としてお邪魔しています。

今日は、大乘仏教の源流を求めてお話しさせていただこうと思います。仏教は、ブツダ積尊時代から次第に世界に広がり、日本でも既に千数百年の歴史を持っています。インド以来、仏教がどのように広がってきたか、仏教伝播のすがたも非常に興味深く、仏教の源流をたどっていると、いろいろ教えられることが多いです。

インドにおいては、釈尊滅後、五百年ほどして「大乘仏教」と呼ばれる運動が起こります。それは、釈尊当時から出家者が歩んでいた「自己解脱」の道だけでなく、それよりも他のあらゆる生きとし生けるものの悟りを目指す、すなわち他の生きとし生けるものを救う「利他行」に徹することがブツダ積尊の本当の心であるとして、その道を求めるという運動であるといえます。日本の仏教は、ほとんどが大乘仏教に属します。その大乘仏教がどのようにして生まれてきたか、はつきりとはわかりませんが、大乘仏教の実践者を菩薩と呼び、菩薩の修行、菩薩のあり方、

菩薩の思想が特に大きな意味を持っています。今日は、それがどのようにして生まれてきたか、見て行きたいと思えます。浄土真宗や親鸞聖人の教えも、その大きな流れの中にありますが、親鸞聖人は、最終的に、「本願の救いの教えが大乗仏教の至極である」と言われます。親鸞聖人がどういう意味で「大乗の至極」と言われるのか、というところまで、お話し出来れば、と思います。

・ 仏教伝播の歴史——ブツダ釈尊と仏塔——

最初に、ブツダ・釈尊がインドで誕生され正覚まじょうを開かれて、仏教の土台が築かれたあと、どのようにして仏教が展開してきたか、仏教伝播の歴史を概観しておきましょう。「表1」にその概要を図示しました。ここで「Buddha（釈尊）」と記しましたが、私たちは、「釈迦族に生まれられた最高の聖者（牟尼）」という意味で釈迦牟尼、釈尊、また「覚られた方」という意味でブツダ（仏、仏陀）などとお呼びします。「釈迦」という呼び方もあり、釈尊の生涯を描く図を「釈迦八相図」ともいいますが、「釈迦」は種族名ですので、仏教の開祖として尊敬するところがあるなら、「釈迦」はよくないでしょう。ここでは、「釈尊」あるいは仏像に関連して「ブツダ」と呼ばせて頂きます。

釈尊の年代は、はっきりしません、「表1」にありますように、専門の先生方でも二、三の説があり、またタイなどでは年次を示すのに釈尊の滅を紀元前五四四年としてその翌年から数える仏暦を使用します。一応、紀元前四五世紀のお方といえましょう。釈尊滅後約五十年して、インド大陸のほとんどを統一したのが、マウリア朝のアショーカ王（阿育王）で、その在位年代は、この表の通りです。専門家は、そこから逆算して釈尊の年代を想定しています。さて、釈尊は、ご存知のように、釈迦族のゴータマ家に誕生して、出家、修行し三十五歳のとき、最高の真実に目覚めてブツダとなられた。その後、この世を去られるまでの四十数年、説法の旅を続けられた。その生涯について、偉大な姿を讃えつつ語り継がれて釈尊の物語「仏伝」となり、仏典の中に、いろいろと文学的な作

品となつて残されています。最期を迎えられた釈尊のすがたを伝える『涅槃経』(パーリ語)には、釈尊が亡くなったとき、仏弟子たちが釈尊のご遺体を荼毘に付したとき周囲の国々の八人の王が争つてその遺骨(仏舍利と呼ばれます)を手に入れようとしたので、火葬の世話をしていた仏弟子がご遺骨を八分割し、それぞれの王に与え、それぞれに塔が造られた、とあります。「塔」とは、インドの言葉では、「ストゥーパ」(stupa)と言ひ、漢訳ではそのまま音写して「卒都婆」「卒塔婆」、略称して「塔」とか「仏塔」と呼ぶようになりました。仏舍利を埋葬して、土

〔表1〕 仏教伝播史の概観(大乘経典を中心に： 右端に、近隣の動きを注記する)

BC6/5C	
BC5/4C	Buddha(釈尊) ：出家・降魔・成道・説法・涅槃など(BC463-383/565-485)
BC3C	仏滅後： 仏塔(遺骨を八分して)の建立/第一結集/仏教教団 マウリア朝 〃 供養・崇拜 〃 [アショーカ王(BC268-232)] [南 伝] 〃 部派仏教：上座部系 大衆部系 〈仏伝・ジャータカ〉 〃 説一切有部、 〃 説出世間部、 〃 〃 〃 雪山部など 〃 ↓ 多聞部など (スリランカ、 〃 讃仏文学 〃 (紀元後にも存続) ↓ タイなどへ) 〃 —ジャータカ：利他の物語=多く語られる ↓ (大乘への影響?) 〃 ↓ ↓
BC/AD —	— [大乘仏教の兆し] 仏塔信仰から 仏像彫像 / 経典誦誦 ・ 経典崇拜 へ —
AD2C	第一期大乘経典 —般若経類、法華経類、華嚴経類など (上座部派) 説一切有部 經量部 クシャーナ朝 中観派論師：龍樹 (Nāgārjuna)・聖提婆 (Āryadeva) ら [カニシカ王(129-152 頃)] (中国へ仏教伝播)
AD3/4C	第二期大乘経典 —入楞伽経、解深密経、金剛般若経、般若心経など 瑜伽行唯識派論師：無着 (Asaṅga) ・世親 (Vasubandhu 天親) ら 〃 〃 陣那 (Dignāga) (インド論理学の発展) 480-540 〃 (日本へ仏教伝播)
AD7/8C	第三期大乘経典 —大日経、金剛頂経など 月称 (Candrakīrti) ら (仏教認識論、論理学の発達) [インド全体が密教化] 法称 (Dharmakīrti) (日本：平安仏教) 〃 中観瑜伽派 寂護 (Śāntarakṣita) 〃 蓮華戒 (Kamalaśīla) ら 〃 〃
12/13C	(仏教：インドからほとんど姿を消す) (日本：鎌倉仏教)

まんじゅうのように大きく土盛りしたものです。後にはさらに分骨したりして他にも塔が建立されますが、この仏塔を中心に仏教徒たちが集まり、釈尊に見え、仏塔があたかも釈尊であるかのように仏塔を崇拜し仏塔供養する、そして釈尊の教えに出遇う場となつて行きます。この仏塔崇拜、仏塔供養が大乗仏教の生まれる要因の一つだろうともいわれます。特に、仏塔が釈尊の生涯を語るなどの場となつたと見られます。偉大な人が現れると、その人のことを語り伝えるのは自然なことです。これが「仏伝」にまとめられることとなつたわけです。仏伝が「八相成道」と言われるのは、「釈尊の生涯は八つの大事な節目となる出来事―主として下天、托胎、降誕、出家、降魔、成道、涅槃の八相―があつて成道された、成道を示される一生であつた」ということで、「釈迦八相図」などともいわれるわけです。なお、日本の三重塔や五重塔は、実は、この仏塔から変形してきたもので、これらも仏塔なのです。

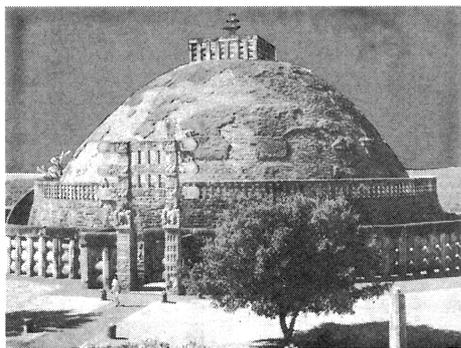
・仏塔について

まずは、この仏塔について、もう少し見ておきましょう。写真①は、「サーンチー」という仏教遺跡にある仏塔です。最初のころ、仏塔は円形でした。しかも、それはだんだん大きくなり、その周りにいろいろな莊嚴が付けられました。数十年前までは、「仏塔の世話は、在家者がやっていたに違いない。出家僧（比丘・比丘尼）たちは関係していません。たはずだ」と考えられていました。しかし、出家僧の規範をまとめた「律藏」の中に、実は、仏塔のこと、その供養のことが記述されています。従つて、出家者たちも仏塔に深くかかわっていたに違いないというのが、最近の研究者たちの見解です。

いずれにしても、釈尊の時代から仏塔は大事なものとされ、人々がそこに集まるようになりました。実は、釈尊が生存されていたときから、釈尊の付随物を大事することがあつたという記録があります。――例えば、王舎城の近くに生活していた給孤独長者ぎやくどくちやうじやという篤信の商人は、釈尊の説法の旅にお供するわけにはいかない、釈尊が戻つて

来られたときには出あえるが、旅に出ておられるとあえない、そこで、「申しわけありませんが、髪の毛かお衣の切れ端か、少しだけいただけないでしょうか。釈尊がおられないときは、それを釈尊として礼拝させていただきます、お傍にいたいという思いでいたい」と釈尊にお願いし、分けてもらったということです。——釈尊が亡くなると、仏塔が造られ、仏塔は、釈尊そのものとして拝され、釈尊とともにいるとの思いを持った、といえるでしょう。実際に釈尊の遺骨が安置されているので、仏教徒たちは、ここにお参りし、そこで仏塔の世話をしている比丘たちから釈尊の話聞き、釈尊に見えま^まという体験をします。そこには思想的にも深いものがあります。拜むことで病気が治ることを願うとかという現世利益とは全然違います。仏塔はブッタそのものであり、ブッタに出あい、ブッタがそこにおられると受け止め、世話人から、「釈尊は、このよう^まに出家された、このよう^まにして説法された。」などと聞くことで、釈尊に直接お会いしている心になる。仏塔は釈尊そのものであり、釈尊に出あえる場所なので、仏教徒たちが参拝する場となり、多くの装飾をつけ、供物をささげるようになりました。

サーンチーには、崩れてしまったものもありますが、今も三つのストウーパが残っています（写真①）。それは大変大きなものです。周りには、石で囲んだ玉垣（欄楯とも）が造られ、大きな門もあります、写真の前面の背の高い門、インドの言葉で「トーラナ」と言います。高さは十二メートルです。塔の頂上には傘のようなものが付いていますが、これは「天蓋」^{てんがい}（「天の傘」）をかたどったものです。インドでは、暑いときに外に出るのは大変で、王たちは、象に乗って出掛けるときに、日本で言う「日傘」を家臣たちがかざ

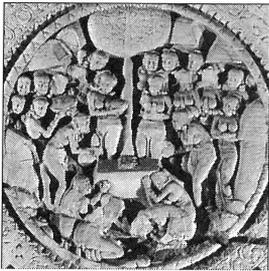


①サーンチー第1塔（西より）：前3～後1世紀初

して日よけしました。天蓋は、もとはこの日傘から来ると言われます。それが、尊敬を表す意味で裝飾として用いられています。ここは周りの玉垣が二段になっています。これも、その柱に図柄を浮彫にするなどして莊嚴さ
れていきました。このようにして釈尊の偉大さを象徴する立派な仏塔ができていきます。

玉垣の裝飾（莊嚴）は、写真①のように、仏塔の周りに石で垣根が造られ、その石柱の間をつなぐと貫石、石柱の上に渡された笠石でできていて、石柱、貫石などに図柄が浮き彫りされています。蓮の花や龍、ブツダ釈尊の生涯の節目となる姿などが描かれます。しかし、古くは、その図柄にブツダの姿は描かれませんでした。写真②はその一例です。円形の中には、上部のこんもりした菩提樹とその下に御座、足跡、その右に合掌する女性、中央左に腰を曲げて供養の品を差し出す女性、などが描かれています。中央に端坐されているはずのブツダは描かれませんが、この図は、村娘スジャーターが苦行中のゴータ王子（のちに悟りを得てブツダとなられる）に供養のミルク粥を差し出し、合掌する場面と見られます。当時は、苦行者に供養することによって願いがかなえられるという信仰がありました。釈尊は、さとりを得られる前に六年にわたる苦行で肉がなくなるほどやせ細って河辺で体を休めておられた、願かけをしているスジャーターはそこへ近づき、ミルク粥を差し出します。そのとき、釈尊はそれをもって修行を断念され、最後の瞑想（三昧）に向かわれたという仏伝の一節です。

——このように、釈尊（ここでは苦行中のゴータマ）は描かれず、それでいて、この図を絵解きする物語を聞くものは、釈尊がそこに在ますと受け止めて、合掌しながら聴聞したのでしよう。この絵のように、浮彫は円形の、一つの絵に物語すべてを描く異時同図法がとられています。仏塔に参詣する人々はそのようにして釈尊に見えたる体験をしていたと思われれます。



②玉垣（欄楯）の浮彫：
スジャーターの供養
（アマラーヴァティー遺跡から）

釈尊のご誕生のエピソードが語られるものにも同じような浮彫があります。母親の摩耶夫人（マハーマヤー）は臨月を迎え里帰りされる途中でルンビニー園に寄られました。アシヨークの花が咲き乱れる中で、その花にそっと右手を触れようとしたとき、王子（釈尊）が右脇から顔を出し生まれました。そして、生まれると、たちまち七歩歩いて、「天上天下唯我独尊」、「こうして迷いの世界に人間として生まれてきた、これを最後の生涯にするのだ（必ずや覚りを得るのだの意味です）」という決意を大宣言されたと伝えられる名高い場面の浮彫があちこちに残されていますが、古いものでは、やはり、釈尊の姿が描かれない。夫人の右脇から顔を出すところも空間のみ、七歩歩く場面は、お世話の侍女たちが持つバスタオルの上の足跡（七つのくぼみ）で示されるなどです。

写真③は、「降魔成道」の場面と見られます。中央の菩提樹、御座と足跡で、深い三昧の中の釈尊を暗示し、左右に武器を持つ悪魔（帝釈天たちの変身だといわれます）が描かれています。これらの悪魔は悟りの道を邪魔する「煩惱」である、その悪魔（煩惱）を一つ一つ退けて正覚を得られたと説かれます。

このように、当初の仏伝などの浮彫は、非常に立体的に描かれますが、釈尊の姿は描かれませんでした。それは、仏塔そのものが釈尊であるという思いがあった。仏塔の前で釈尊のお話（説法や仏伝など）を聴聞する、そしてそこにブツダ釈尊にお会いしているとの思いを持っていたのでしょう。

仏教伝播の流れ

ここで、「表1」によりつつ釈尊以後の仏教の流れを概観しておきましょう。



③降魔成道：ブツダを、菩提樹・空席の御座・仏足跡で暗示（アマラーヴァティー遺跡から、玉垣の一部）

釈尊の説法に出会って、出家した仏弟子たちは、釈尊の教えに従って深い瞑想（三昧）で眞実を見つめる修行をする道を歩みます。出家して乞食する（托鉢して供養の食事で身を養い修行する）、その修行者が比丘（女性性は比丘尼）と呼ばれます。その修行者たちは次第にグループをなし、釈尊滅後には、グループごとに修行体系ができました。これらの仏教を「部派仏教」と言います。それら部派の中で、多くは釈尊以来の伝統を守って次第に学問的な探求に専念するようになります。それを「上座部系」(Theravāda)と呼びます。それに対して、アショーカ王時代あたりになると、「生活様式が変わって、新しい時代には時代に合った新しい道もある」と問題提起するグループが現れます。「伝統的な修行道だけでなく、新たな、あらゆる人が歩める道が開かれるべきである」という意味も込めて、新たな方向性のグループが現れる、これらを「大衆部系」(Mahāsaṅghika)と言います。厳密には、きちんと二つに分けられるわけではありませんが、「上座部系」「大衆部系」のグループ（部派）が二十部派余りあったと見られます。この「大衆部系」の動きが大乗仏教運動に影響を与えているのではないかともいわれています。また大乗仏教時代以降まで存続した部派もある、上座部系では説一切有部が、大衆部系では説出世間部が長く存続していたようです。とにかく、部派仏教時代は、自らの解脱を求めて自ら修行するという「自己解脱の道」、いわゆる出家仏教ですが、アショーカ王時代に王の特使派遣もあって、インド周辺に仏教が伝えられました。現在のスリランカやミャンマー、タイなどの仏教はこの上座部系仏教で、南に伝えられたという意味で南伝仏教とも呼ばれ、その伝統が今に生きているといえるでしょう。

・ 仏伝やジャータカの意味

さて、紀元前後に興ってくる大乗仏教の動きの要因として、「表1」に挙げたように仏伝（とりわけ釈尊の前生物語「ジャータカ」、經典読誦（經典崇拜）、仏像彫刻などが注目されますが、その辺を見ていきましょう。

先ほど触れたように、仏塔などの場で釈尊の生涯を語る、そしてそれを聞きながら釈尊に出会い釈尊の教えに出あうという体験があつたと見られますが、その中に「ジャータカ」(Jataka)が語られるようになります。「ジャータカ」とは、釈尊の過去世物語で、仏伝の中に、紀元前二世紀ころからでしょうか、挿話として語られるようになります。漢訳では、「本生」や「前生」と訳されます。釈尊は、釈迦族に生まれる前に、生まれ変わり死に変わりしながら、悟りに向かうための善根を積まれたのだ、という、釈尊のあまりにも偉大なることを思うからでしょう、過去世で長年にわたつて積まれた善根によつて釈迦族の王子に生まれ正覚にまで至られたのだということで、過去世物語が語られたと見られます。ジャータカは、釈尊が過去世で何をしてきたかを物語っています。文学的、昔話的な物語になっています。八百編以上の物語が残されていますが、理解していただくのに、具体的な一例を紹介しましょう。「物語では、過去世の釈尊が「菩薩」と呼ばれています。

*

ある仏教徒(優婆塞)が釈尊たち僧団を接待し食事を供養した、そこで釈尊が「このような施しは実にすばらしいことだ。昔、身命までも差し出したことがあつた……」と供養を讃えながら、過去の物語を話された——このように言われて、釈尊自身が過去世の物語を語り始められます——。大昔、菩薩がヒマラヤの山中の兎に生まれてきたときのことだ。友達としてカワウソと山犬と猿がいて、仲よく暮らしていた。智慧者の菩薩、兎は、「修行しなければいけないのに、修行ができない兎に生まれたのは、過去の世で善を積むことがまだ足りなかった、今度こそ、善を積んで修行のできる身に生まれるのだ」と決意します。ある満月の前日に、「明日は満月だから、森の中に住む修行者たちが一堂に集まり布薩会(懺悔の会です)をする。ぜひ供養をさせてもらおう」と、友達のカワウソと山犬と猿にも、「一緒にやろう」と誘う。みんな、「それはいいことだ」と言つて、それぞれ約束をして家に戻つた。そこ

で、夜中に苦行者が訪ねてくる。まず、カワウソのところへ来て、「実は、この森には食べ物が無い、もし食べ物をいただけたら布薩会に参加して修行を続けられる」と。カワウソは、兎との約束を思い出し、「私が集めた食べ物を食べて森にとどまってください」と、川で集めておいた魚を七尾ほど差し出した。苦行者は「明日の朝までそのままで…」と言って山犬のところへ行く……。—このようにして修行者は山犬、猿、そして兎を訪ねます、その順に、同様の話が三回繰り返され、最後に、兎です——。菩薩は、「どうぞ、火をおこして待っていてください」と言い、修行者は火をおこして待つ。菩薩は、「私は、こんなに弱い動物なので、修行者にもものを差し上げる力がない。私の体はどうせ朽ち果てるのだから、これを食べてもらおう」と決意して、火をおこしたところに戻ってくる。ほかの動物もいつの間にか集まり、「兎よ、火をおこしてもらって、自分で体を温めるつもりか」と冷たい目で見られる中、「修行者様、私は力のない動物です、私の肉体を食べて、どうぞ一日でも長く修行を続けてください」と言って、火の中に飛び込みます。すると、突然、修行者は帝釈天に姿を変え、「菩薩の兎さんの気高い決意のほどを確かめようとしたのです……」と言って、兎が火に入る前に受け止める。そして、菩薩のすばらしい心を讃えて、月に兎の姿を残した。——最後に釈尊が「この時のカワウソが今のアーナンダ（阿難）で、……賢い兎はこの私であった」と言って物語を閉じます。

まさに修行者のために自分の命を投げ出すという話です。写真④は、これを一つの浮彫に描いたものです。釈尊の過去世物語「ジャータカ」では、こういう話がほとんど語られました。まさに、「自分を犠牲にしても、ほかの人を助けなくては」という利他行の心を描いています。この利他行の心こそがブツダの真まことの心であるというわけで、

*



④兎王前生

仏塔などの場で語られ味わわれたのです。

釈尊の説法の旅もそうです。ブツダは、覺りを得られたあと、説法に立ち上がったときから、裸足でぼろ切れを着て、説法の旅を続けられた、これは、まさに自分のことを二の次にして—自分のことを二の次にしているとは思われてないですが—人々に法を説かれる、これが本当の利他行です。このようなジャータカに示される利他の精神が大乗仏教の源の一つになっていると見られるのです。

・ 經典の編纂

少し話を戻しますが、經典の成立に触れたいと思います。まず、釈尊滅後に、釈尊の説法をまとめる會議「第一回結集」(仏典編纂會議といえます)がありました。これは、直接の仏弟子たちが集まり、釈尊が何を説かれたかを確認し合ったものです。「世尊(釈尊)は、このように説法された」と確認し合い、それが伝承されました。會議では、偉い仏弟子たちがいろいろ話し合った結果を受けて、阿難がこれを暗誦しました。「私は、このように聞きまして……」で始まります。こうして經典ができます。釈尊の遺教の散逸をふせぎ仏説の確かさを確立するという意味があったといえます。さらに、百年ほどして戒律についての異議が出るなどして第二回結集が行われ、アシヨーカ王時代に三回目も行われた。なぜ、二回、三回と行われたかという点、やはり伝えられる間に異議異説がでて変わっていくことがある、釈尊の教説が多様なものになり間違つたものになつてはいけないので、確認し合う必要があつたわけです。

そして、釈尊から五百年ほど後、紀元前後になり、「あらゆる生きとし生けるものが悟りに至る道」を求めるといふ大乘仏教運動(あらゆる衆生を救おうとする運動)の時代になると、「釈尊が説かれた」という同じかたちですが、新しく大乘經典が生まれます。それは、仏塔の前でその經典を誦誦してブツダ釈尊に見える(それは大乘の担い手

である菩薩たちが詠っているがブツダのことはであるという心で読誦する」、ブツダ積尊を讀えつつ供養する、という仏塔供養がこの大乘仏教運動に展開したのであるかと考えられます。最近は大乗經典は、最初にこのようにして現れたのではないかと見られています。このようにして紀元後まもなく、大乘仏教関係の經典が編まれ始めます。「第一期大乘經典群」と呼ばれますが、紀元前後から二世紀頃に、般若經類や華嚴經類、法華經類が編まれます。「積尊は最初に華嚴經を説かれた」と言いますが、歴史的には、紀元後間もない頃に文字になったのです。第一期の中で重要な經典が大乘仏教の根本思想「空」を説く般若經群で、『八千頌般若經』や『二万五千頌般若經』が比較的早く成立したと見られます。詩頌にして八千頌、あるいは二万五千頌に相当する長さの經典ということでこのように呼ばれます。さらに、テキストが次第に大きくなり、『十万頌般若經』が編まれます、漢訳の『大般若經』は六百巻という膨大な經典です（十六会をまとめた經典群ですが）。

その頃（直後に）、龍樹菩薩（ナーガールジュナ）や、その弟子の聖提婆菩薩（アーリアデーヴァ）らが現れ、大乘仏教の思想「空」の哲理を論理的に論述して、中觀学派と呼ばれる学派が生まれます。浄土教や浄土真宗において祖師（真宗では七祖）として挙げられるなかの第一が、龍樹菩薩です。紀元後一五〇年から二五〇年頃の人だと言われます。その弟子の聖提婆もほぼ同じ世代で、「空」の哲学を厳しく論じた人です。龍樹は、浄土教にとって非常に大事な『十住毘婆沙論』という書物を残しました（撰述の真偽は不確かですが、少なくとも、その詩頌部分は龍樹撰述でしょう）。——これが第一期大乘經典の時期です。

このころ、インドはクシャーナ朝の時代になります。このときには、北インドが統一され、仏教が栄えました。そして三、四世紀頃になると、第一期の大乘經典とはいくらか趣きの違う經典が生まれます、『般若心經』、『入楞伽經』、『解深密經』などが編まれ、第二期大乘經典群と呼んでいます。その中でも、禪宗でよく読まれる『入楞伽經』に、「い

ずれインドの南のほうに、龍樹という論師が現れる」と釈尊が予言されたという詩頌や、「龍樹は、竜宮へ行き、華嚴経を授けられた」という詩頌が出てきます。龍樹より後に成立したはずのこの経典に予言されているということは、龍樹菩薩が当時すでに名高く、重んじられていたことの証しであり、南方の出身であることが想定されます。「解深密経」は、龍樹より二百年ほどのちに現れる瑜伽行唯識派の根本の経典です。般若経系では、膨大な経典となったものがこの時期にそのエッセンスをまとめるようにして短くなり『般若心経』、『金剛般若経』などが編まれます。

その後まもなく先ほど触れた「瑜伽行唯識派」というグループが現れます。その中心の論師が、世親（浄土教関係では天親菩薩）と、その兄の無着で、彼らは、「あらゆるものは心の現れであり、それ以外はない。私たちは、見ているものが実在していると思っているが、それは私の心が心に映った姿を見ただけである」という「唯識」を説きます、つまり「世界は心だけである」といって、大乘仏教の「空」の世界を語り、その立場で、心の世界を非常に精細に分析するグループが大乘仏教の中に出てきます。

中観派の龍樹たち、瑜伽行唯識派の世親・無着らのあと、インドでは仏教思想が非常に盛んに展開されます。そして、インドの社会は神秘的なものを求めて密教化されます。これは、インドの土着の古くからの文化と、インドへ入ってきたバラモン教（現在のヒンドゥー教）のアーリア人たちの文化が触れ合い、新しくなっていた面があると言われます。紀元後七、八世紀ごろには、特にそれが強くなり、仏教にも影響してきます。どちらかというところ、密教が中心になり、密教的なものを仏教の中できちんとまとめていく感じがあります。第三期大乘経典群がそれで、『大日経』や、真言密教の中心の経典ともなる『金剛頂経』などが出てきます。——大きく見て、大乘仏教の経典としては、この三段階の展開があったと見られます。

ところが、十二世紀から十三世紀ごろになると、仏教はインドから姿を消します。これは、イスラムが入ってき

たのが大きな原因とみられています。インド土着のヒンドゥーは、その後もずつと残りますが、残念なことに、革新的で徹底した平等を説く仏教は、イスラムの厳しい攻撃で姿を消します。ただし、コルカタの辺りには、古くから仏教が残っています。

・仏像の出現

さて、先ほど触れた仏像の出現に戻りましょう。仏塔などの装飾に浮彫された図柄には、古くはブツダの像がないと申しましたが、大乘仏教の運動が起る紀元後一世紀頃になると、ブツダの像が描かれるようになります。インドで最初に仏像が現れたのはどこかという問題もあります。その一つが北西インド（パキスタン領）のガンダーラ地域といわれますが、今一つ、デリーから南東へバスで一、二時間行ったところに、マトウラーがあり、ここも仏像発祥の地と見られます。ここは、古くから芸術作品の多い都でした。バラモン教、ヒンドゥー教関係のものだけでなく、仏教関係のものも残されていました。写真⑤はその一つで赤茶色の砂岩の彫像です、ふくよかなゆつたりした像です。

ガンダーラ仏はギリシャ、ヘレニズム文化と接する地域でギリシャ彫刻の特徴があります。マトウラーではそれとは全く趣の違う仏像が生まれました。古くはブツダの像を描かなかつたのに、どうして仏像が生まれることになったか、はつきりしたことは分かりませんが、一つの意見を紹介します。



⑤ 仏立像 (マトウラー)

う。

先ほど申しましたように、ブツダをほめたたえる仏伝やジャータカが語られるうちに、仏塔そのものをブツダと見るのでは、次第に心が合わなくなってきた、ブツダあるいは菩薩の状態のブツダに直接お会いして、利他の心をもにする、ブツダに護られ後押ししてもらおう世界が欲しくなってきたのではないかと。———というのです。

また、紀元前二世紀頃にインドを統一したマウリヤ王朝のアショーカ王の三十年余の治世のあとは、再び諸国が対立する時代が続き、紀元後間もなく、北から入ってきた月氏族が、インド北部を中心に先ほど申したクシャーナ朝を築きました。この三代目がカニシカ王です。クシャーナ朝は、初めヒンドゥー教や仏教関係の寺院などを破壊しました。この時期、仏教徒は、非常な危機を感じ、「本当にブツダに会いたい。もう一度、ブツダに出てきてほしい」という願いが起こったのではないかと、研究者の意見があります。カニシカ王は、アショーカ王と同様、最初は仏教徒ではありませんでしたが、インド北部を制覇したあとは、ほかの宗教を保護すると同時に、自ら仏教徒として仏教を手厚く保護したため、カニシカ王の時代以降、仏教は、また栄えました。

そのような中、ガンダーラ仏の最初期のものとして「円輪光」と呼ばれる彫像が出現しました、写真⑥です。中央に円盤、周りがぎざぎざ、光輪ですね。これは太陽と見ることができ、釈尊や阿弥陀仏には光背があります。ブツダは、智慧の輝きを持たれている、その智慧の世界を光で表わす、この円輪はその光明ですね、恐らくブツダの再来を願った、その願いの表出だといふのです。上に菩提樹、葉が垂れ下がっています。古くから、インドの神々が仏教を守護してくれているとされますが、左右にいる二人はその神、帝釈



⑥円輪光の礼拝

天と梵天と見られます。中央の光明輪に合掌しています。合掌されて太陽の光で表されている円は、悟りの世界、そのはたらきを表しています。ブツダは、まだ人間的な姿ではありませんが、「ブツダに何とか現れてもらいたいという思いが、この形相すがたに描かれたのではないか」と言われます。そして、この「円光輪」が現れてまもなく、ガンダーラ地域でも仏像が彫像されるようになりました。その一例が写真⑦、ガンダーラ仏です。ギリシヤの影響ですね、髪の毛は、長髪のままウエーブがあり、写実的な描写でお顔も起伏があります。私たちと違うのは、頭の頂に「肉髻にくげ」——智慧のコブです——がある、悟りの智慧を象徴しています。ブツダは、覚者なので、人間的な姿の仏像で描く場合でも、迷いの姿とは違うことをその姿に表します。——仏伝には、釈尊が生まれたとき、「占い師が、『すばらしい』と言つて涙を流した』といひます、父王が問いただと、「実は、生まれた太子には、すばらしい印がある。将来、偉大なる聖者になるか、世界を統一するような王になられるでしょう」と言つたとあるのと同じです——。その偉大さの印は大丈夫相と言われます、(もとは偉大な男の相という意味ですが)「偉大なる人物の姿」ということで、ブツダの悟りの威徳を示すのに特別な印(三十二相といひます)で示すようになります。肉髻や長い耳(あらゆる意見や問いを聞き届ける力量を示す)や、手足の水かき(すべてを救う働きを示す)など、また眉間の白毫相びやくこうは白い毛が右巻きに巻いていて伸ばすと一丈六尺ある、ここから智慧の光を出す。いずれもブツダとしてあらゆるものを救うという利他の働きを示す印ですね。この⑦の図柄はブツダが説法される姿で「説法印」と言われます。

このようにして、ほとんど同じ時期に、マトゥラーとガンダーラで仏像が描かれ始める、一端描かれ始めると次々と描かれるようになり



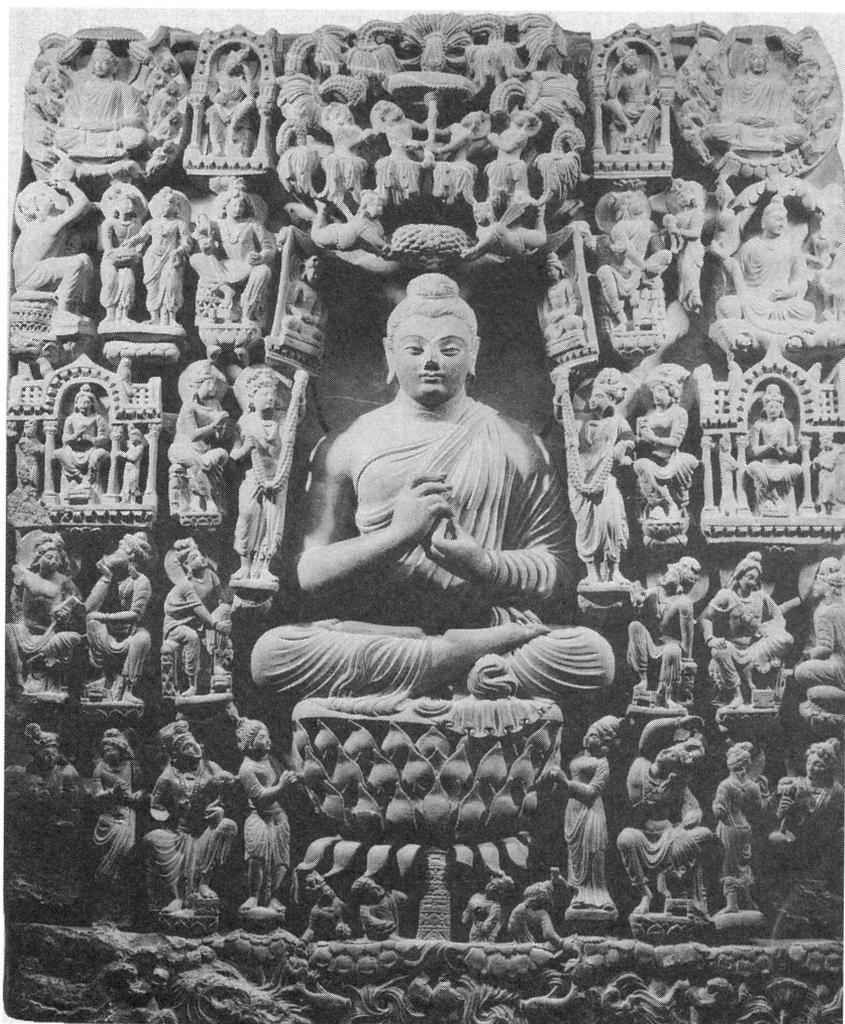
⑦仏坐像 (ガンダーラ)：説法印

ます。これは、ブツダに出会い、ブツダに護られながらブツダと同じ「利他行」の道を進む、仏の加護のもとに菩薩道を歩むという思いの現れであろうと思われるのです。

最後にマンガラの興味深い仏像群の写真⑧を紹介しましょう。ガンダーラの北部で出土したもので、以前は「舎衛城の神変」を描いたものとされましたが、最近では異論が出されています。高さが一メートル余りの石版で、すばらしい彫刻です。

「舎衛城の神変」の彫像だという説について。コーサラ国の都だった舎衛城で、釈尊が神通力を発揮された物語で、大乘仏教が生まれてくることに関連した、ジャータカ的な話です。——コーサラ国の波斯匿王（プラセーナジツト王）は、釈尊よりもずっと若い王でした。この王が釈尊に出会い、「お釈迦様は、智慧第一で神通がおありです。どれほどのものか、ぜひとも見せていただきたい」とお願いをしました。ブツダは、神通力を発揮し、王に千仏もの仏（化仏）の世界を見せられた、その物語だろうというのです。実際に、仏たちがたくさん並んでいる絵はほかにもあります——神変（神通力ですばらしい世界を出現させること）として物語が語られたのは、恐らく仏教徒として、「仏に会いたい」という願いがあったからでしょう。

しかし、この絵については、最近では、「大乘仏教関係のある経典を釈尊が説いている場面ではないか」と言われ、荒牧典俊先生（京都大学名誉教授）は『大阿弥陀経』の「曼荼羅」図像だろうと言われます。浄土教の根本経典『無量寿経』の古訳『大阿弥陀経』にぴったり合うといわれます。「中央の説法印は阿弥陀仏……、向かって右手の一番上に端坐する仏には周りに放射状に多く仏が描かれている、これは燃燈仏ではないか」と。実は『大阿弥陀経』などには釈尊が現れる前に仏たちがおられた」と説かれ、その仏名が列記されます。舎衛城の神変もそうですが、「菩



⑧仏說法図（ガンダーラ：モハメッド・ナリ出土） 舎衛城神変か、阿弥陀如来說法か？

薩たちは、仏塔か仏像の前で、仏たちに見えるという体験をしていたのだろう」と言われるのです。「その最初の燃燈仏と仏たちがこれだろう」と。向かって左側の上部も、同じように放射状に仏たちがおられる。「法蔵菩薩の物語だろう」ということです。『無量寿経』には、昔、法蔵という王様が、師仏である世自在王仏に、「私も菩薩の道を究めて、同じ悟りを完成したい。どのようにすればいいでしょうか」と問いかけ、法蔵は、世自在王仏に見守られながら、菩薩の誓い（四十八願、『大阿弥陀経』では二十四願です）を立てて菩薩道を修行し、阿弥陀仏の世界が完成された、と説かれています。それで、この左上の放射状の仏たちについて「世自在王仏がいて、周りの放射状の仏たちは、世自在王仏に続く仏たちだろう。そのすぐ下で、手を上げ合掌しているのが法蔵菩薩だろう」と、荒牧先生はおっしゃいます。三十年前に初めてお聞きしたときは驚きました、阿弥陀仏の彫像がある、ということでした。しかし、何度か聞く内に「そうだな。そう読める」と思うようになりました。——皆さま、いかがでしょうか。

中央の〔阿弥陀〕仏の両脇に、棒を持つ菩薩がいて、棒の先、中央の仏の頭の両側に鏡のように張り付いて端坐する菩薩は、『大阿弥陀経』末に登場する観音菩薩と勢至菩薩ではないか」と言われます。また、中央の仏が坐する蓮華座の下には見上げる菩薩たち、蓮台の下には魚や蓮華が描かれる、浄土の蓮華池ですね。これらも、『大阿弥陀経』の記述とびったり合うということです。——三〜四世紀頃の造像と言われ、〔阿弥陀仏〕のことが詠われていた時代に彫られただろう」ということです。

大乘仏教の運動が始まるころに、このような仏像が出現した、それは、菩薩の道を歩もうとする人たちの深い心のうちで、生きたブツダと出あうという体験とともに、そういう具体的な姿のブツダを求める心があって出てきたと思われれます。

特に、浄土教関係では、「阿弥陀仏の本願の働きによつて救われていく」として、大慈悲の働きが示される、この他力の教えについて、「大乘の至極である」と親鸞聖人は断言される、そこに聖人の卓越した見識を感じるのである。聖人自身は、「わが身は、菩薩の道など歩めるような者ではない、自分中心の欲望に支配された凡愚である」と、厳しく自己を見つめられ、そこから逆転して、「利他行の菩薩道を自ら歩むのではなく、利他行の大きな働きを身に受け救われるという他力の道こそ、菩薩道の究極である」と言われることになるのは、至極自然なことともいえましよう。私は、親鸞聖人の言われる「大乘仏教の至極」について、本当にそうだと、しみじみ思わされているところです。

〔画像写真の出典〕

『古代インドの文化と文明』（K・C・チャクラヴァルティ著、東方出版、一九八二年）

『本生経類の思想的研究』（千潟龍祥著、東洋文庫、一九五四年）

『図説佛教語大辞典』（中村元編著、東京書籍、昭和六三年）

『ガンダーラ美術Ⅰ 佛伝』（栗田功編著、二玄社、一九八九年）

『ガンダーラ美術Ⅱ 佛陀の世界』（栗田功編著、二玄社、一九八九年）

〈キーワード〉

大乘仏教、大乘経典、仏像、仏伝、ジャータカ、菩薩道、仏塔、阿弥陀仏